

厳島の特殊神事 神衣献上式

平清盛が平家の氏神と崇敬した安芸国の厳島神社に、毎年新年を迎えた正月午前零時に新しく神衣を献上し衣替えをするという神事がある。

平安期末期の承安四年（1174）庚午三月二十六日付の「建春門院御方御神宝注文」に大宮、中御前、若宮が確認され、大宮の一座の構成がわかる（「野坂家文書 316号」）。また宝暦年間（1751～64）ごろの「伊都岐島皇太神宮御鎮座記」には、大宮を田心姫命、中御前を市杵島姫命、若宮を湍津姫命に当てるとされている。

神衣献上式は、正月零時から、年が変わると新しい衣を撰社客宮の御祭神第一殿（大兄客人宮（おおえのまろうどのみや）から始め、ついで隈岡客人宮（くまおかのまろうどのみや）に玉殿内の旧神衣を下げ、折櫃から新神衣を取り出し献上する。ついで本殿第一玉殿（大宮（おおみや））第二殿（中御前（なかのごぜん）・若宮（わかみや）二座分）の順で行われる。

次に献酒式が行われる。まず客人社から始められる。神酒が注いである土器を三方に載せ献酒する。そして撤下（神仏に供えたものを取りさげたおさがりとも）される。撤下された土器の神酒を銚子に移し、宮司以下の神職はこれを頂戴した後に客人社を退下する。つづいて本社の献酒式を行う。客人社と同じ次第で第一殿（大宮）、第二殿（中御前・若宮の二座分）の順で行われる。

献上式が終わると、宮司以下の神職が改めて本社、客人社に行き神拝する。これは新年の挨拶といわれる。そして午前2時頃ようやくすべての神事が終わる。

（神衣が出来上がるまでの祭儀）

御裁式 12月26日（神衣裁縫のために臨時委嘱された老内侍は29日までに縫い上げる）

御綿入式 12月29日（大宮、中御前、若宮の本殿三座分は綿入れを行う式）

神衣畳替式 12月31日

神衣御祓式 12月31日

以上をもって献上式の前儀は終わり、元旦の神衣献上式を待つのです。

（本殿三座）

大宮（おおみや）

中御前（なかのごぜん）

若宮（わかみや）

（客宮二座）

大兄客人宮（おおえのまろうどのみや）

隈岡客人宮（くまおかのまろうどのみや）

の五座に新しい神衣を献上します。

神衣の表は剣花菱三亀甲神紋織出、白稜地11丈。

裏は羽二重地11丈。

三二六 建春門院神寶注文
（端裏書）
〔建春門カ〕女院御方御神寶注文〕
大宮
大日經 理趣經 巳上納銀筥
中御前
公家御装束一具
蒔繪手筥一合 在物具
客宮
弓 箭 釵
金銅馬 在鞍
承安四年 甲午三月廿六日 丑关
御參着

(神衣の寸法)

大宮	<small>たごりひめのみこと</small> 田心姫命	4尺9寸
中御前	<small>いちきしまひめのみこと</small> 市杵島姫命	3尺3寸
若宮	<small>たぎつひめのみこと</small> 湍津姫命	2尺9寸

おおえのまろうど 大兄客人と くまおかのまろうど 隈岡客人は2尺同寸法。

五座のそれぞれの神衣はおおえのまろうど大兄客人とくまおかのまろうど隈岡客人が同寸法で一番小さく、若宮、中御前と大きくなり、大宮が最も大きく仕立られる。これは人格的に見た生育の過程を表すものとされる。

客人宮におおえのまろうど大兄客人とくまおかのまろうど隈岡客人が客人神として出現、ついで本社へお還りになった若宮、中宮(中御前)、大宮と成長される。その体を表して神衣は順次大きく仕立られるという。

巖島神社では大小いかなる祭礼も客人社を先に祭る慣例はここにあるという。

日本書紀の天孫降臨神話や海幸山幸神話などで、誕生した皇子を包む具とされるまことおうふすま真床覆衾が神衣という。まことは「床」の美称(ほめことば)。おうはおお「覆う」の転で、ふすまは「掛け布団にあたる夜具」。